卒業論文

「何者」にもなれない大学生たち

——大学から職業へのトランジションを再考する——

九州大学　文学部　人文学科　人間科学コース
社会学・地域福祉社会学専門分野
2019 年度入学　1LT19106M　島田道久
2023 年 1 月　提出

要約

現代社会は「はたらくこと」に生活に必要な原資獲得以上の意味合いが考えられる時代である。映画『生きる』では、ある一人の終末期の男の変身が描かれているが、そこからは他でもない自分になること、つまりアイデンティティの確立が、はたらくことを通して人間が向き合わなければならない人生最大の課題であるのではないかと読み取れる。他方、多くの人間にとってはたらくことの入り口となる就活を描いた小説『何者』に目を向けると、そうした大きな課題が早くも大学生たちに突き付けられており、やはり多くの学生がアイデンティティの確立で苦悩していることが窺え、ここに問題意識を持った。

そこでトランジションに挑む大学生らが、自己の形成や伝達をどのように達成していくのか、そのプロセスのどこに課題を抱えているのか、大学生とは切っても切り離せない「大学」がそこでどのような役割を果たせるのか、あるいは果たせていないのか明らかにしていく。

2章ではトランジションを司る二つの要素、雇用とアイデンティティに関しての先行研究から、日本の「型」とそこで形成される大学生像を提示した。苛烈な競争からビジョンが空洞化しやすく、またメンバーありきの雇用形態のため仕事と自己の関係性は意識されにくいうえ、自己の多元化が顕著になってきている中で、統合した自己を確立し、それを自ら分析して仕事と結びつけることが求められるという、矛盾の多いトランジションの構造が明らかとなり、またそのなかで自己啓発をしながらもがく大学生の姿が想定された。

3章では2章で提示した大学生像の妥当性を、小説『何者』の登場人物を分析することによって確認した。想定していた通りのような大学生が登場した一方で、問題がさらに複雑であることを投げかける登場人物もおり、トランジションを検討するうえで取り上げた先行研究に表れていないさらなる要素に目を向ける必要性が出てきた。また、現代の日本が「何者」かになるという目標が広く共有されている一方で、そのための手段は共有されていない「自己実現アノミー」の状態であることを示し、手段の検討の必要性も提唱した。

4章では、前章で問題となったアイデンティティ確立の手段として、ハンナ・アレントの「活動」理論を持ち込む可能性を提示した。彼女の「活動」は自己の形成と伝達を叶える一定の基準を与えてくれる点で有益である。

5章では前章で手に入れたアレントの「活動」達成の基準をもとに、3名の若者へのインタビュー調査のデータを分析した。大学生活で「活動」を達成することで大学生らは自分ら

しさの認識ができていた。また、大学は自分らしさの形成において役割を果たし得ると言えたが、「活動」の達成や大学の役割を阻害する要因も確認できた。アルバイトのウェイトを自分で制御する難しさや、本来大学の存在意義を高めるはずの学習の厳格化、就活のウェイトの増大、そしてコンテンツ偏重の選考などである。

続けて 6 章では 3 名の就職活動に目を向けた。この段階でもやはり「活動」の達成が有利にはたらいていたが、またしても「活動」を阻害する構造が確認された。「企業ウケ」を重視して自分を使い分けるように啓蒙するリクルート産業や就職支援の存在、演劇的な企業、二つの就活恐怖とそれを煽る第三者などがその要素となっている。また、潜在的な自己を認識するうえでの他者の重要性が強調されたいっぽうで、大学内のキャリア支援などはアイデンティティの確立・伝達に苦しむ学生の助けにはならなかった。

7 章では本論文の総括をしつつ、大学生にとってのトランジションの持つ意味合いについて、『生きる』と『何者』とインタビュー調査とを交差させて考察している。社会に出る前に「何にでもなれる可能性」を自らの手で捨て、自分の姿を受け入れるプロセスこそトランジションの本質なのであり、トランジションを先延ばしにすることはその後の人生における危険性をはらむという結論を導き、論文を締めくくった。

目次

1. はじめに　――はたらくことは、アイデンティティの問題――　1
1-1. 映像作品に見る　――映画『生きる』より――　1
1-2. 文学作品に見る　――小説『何者』より――　2
1-3. 問題意識　3
1-4. 研究の視点　4
2. 先行研究　7
2-1. 日本型キャリア形成　7
2-1.1 日本型メリトクラシー　7
2-1.2 ハイパー・メリトクラシー化　9
2-1.3 日本型雇用　11
2-2. 若者とアイデンティティ　12
2-2.1 アイデンティティ志向と消費　12
2-2.2 アイデンティティ志向と教育　13
2-2.3 アイデンティティ志向と職業移行　13
2-2.4 多元的自己　14
2-3. 小括　――なぜ、「何者」かになることは目指されるのか――　14
3. 「何者」にもなれない大学生　17
3-1. 小説『何者』の大学生　17
3-1.1 登場人物分析①　小早川理香　17
3-1.2 登場人物分析②　二宮拓人　19
3-2. アイデンティティが問題になる社会　21
4. ハンナ・アレントを読む　23
4-1. 研究におけるアレント理論の位置づけ　23
4-2. 労働・仕事・活動　23
4-2.1 労働　23
4-2.2 仕事　25
4-2.3 活動　26
4-3. 小括　27

4-4.　展開　――「活動」的大学生活の可能性――　28
5. 大学生活を語る　31
5-1.　インタビュー調査概要　31
5-2.　M さんの語る大学　32
5-3.　U さんの語る大学　34
5-4.　K さんの語る大学　35
5-5.　考察　38
6. 就職活動を語る　40
6-1.　M さんの語る就職活動　40
6-2.　U さんの語る就職活動　43
6-3.　K さんの語る就職活動　46
6-4.　考察　50
7.　総括　――「死」を受け入れた先に、自分がある――　52
7-1.　総括　52
7-2.　キューブラー＝ロス　死の受容過程　53
7-3.　渡辺勘治の死と大学生の「死」　54
7-4.　トランジションとイニシエーション　55

文献　57
謝辞　59